

「領域」について

—特に「健康」「社会」「自然」について—



坂元彦太郎

八一

「領域」という考え方を、現行の幼稚園教育要領がうち出してから、幼稚教育界に、一方ではこれに全く依存するような風潮を生み、他方ではやかましい論議のたねになった。ところが、小学校の改訂学習指導要領では、同じことばを、諸教科・「道徳」・特別教育活動・学校行事などを指すのに用いているし、また、場合によつては、教科の中できらに区分される部門をいつていることもある。

このことが、いつそう領域にまつわる混乱を増したが、しかし、幼稚園の先生方の大半は、この概念なしには教育の中味を考えられないまでになっている。こうした事態に即しながら、過度の混乱をおこさないで適切な改正が加えられていいときが来ていると思うが、その問題点を概観してみるのも意義のないことではあるまい。

先ず、「領域」を無反省に「教科」と同じように使うことが残念ながらいきわたっているが、そのことばを使うことの利便も決してないではない。何といっても、幼稚教育のことを語るのに共通のカテゴリーをもたせてくれたことであり、これによって、幼稚教育に関するさまざまな問題も分類整理するわくぐみが与えられたことである。

しかしながら、「領域」にはさまざまなもの問題が内蔵されていて、そういうものであることを自覚して使うのでなければ、さまざまなあやまりをおこすおそれがある。あげ足をとつたり、重箱のすみをほじくつたりして、いたずらに人々に不安をひきおこすためにではなく、むしろ、「領域」を善用するために、それの中に抱いている弱味をはつきりさせておきたいのである。

先ず指摘していることは、それぞれの領域にまとめるべきである。しかし、その内容は、相当の無理があることである。いいかえれば、それぞれの領域の中にあげられている「のぞましい経験」が、一つの部門にまとめられるほど同質的であるとはいえないようなものが雜然としている、ということである。

たとえば、「健康」の領域について考えてみよう。のぞましい経験としてあげてあるものをみると、誰にでも気付かれるのは、保健や衛生のための習慣を育成することに属するものと、身体的な運動に属するものとが、併存していることである。この両面は質的にちがいがあることはむろんであるが、その上に、これらについての指導上のねらいや方法に大きなちがいがあることも見落してはならないであろう。たとえば、前者は原則として教師が常に抱いておるねらいであって、さまざま（「健康」以外の）活動の中でせぜんにいつの間にか達成されるようなものであるのに対し、後者は、そした身体的な運動自身をある程度はつきり露出させて経験させるようにしていい場合が多いのである。——だからといって、「健康」という一つの領域が成り立たないというのではなく、こうした異質的なものがそれなりに併存しているということを知つていて、適切に運営することがのぞましい、というのである。

「健康」はまだいい。ことがらがはつきりしているし、保健や衛生などに関係することはごとくそりこの中に入るのだ、としてしまえばそれではまずむのであるが、「社会」となるといつそう複雑になつてくる。この場合ののぞましい経験としてあげてあることを分類すると、個人的な生活面に関すること、集団的・社会的な生活面に関すること、ならびに、社会生活に関する初步的な知識の三つの柱をたてることができるであろう。この前二者と最後のものとの間には、非常に異質的なものがあることを見逃すことはできない。後者は、いわば、小学校段階になれば社会科の学習に通ずるものであって、それにも似た学習形態をとることも不可能ではない。しかし、前二者になると、昔のことばでいえば、むしろ訓育とでもいったもののねらいであって、性格や習慣や行動の育成に關係することである。したがつて、こうしたねらいが、後者のようなことを通じて達成されることもあるが、もつとひろいさまざまな生活の中で達成されるものである。この両面の混同は、決してのぞましいとはいえない事態をひきおこすこともありうるのである。

さらに、ある論者たちが指摘するように、どちらかといえば、個人的な自我に関係することまで、普通の集団的活動の中にませてしまつてゐることになるので、それぞれの位置付けがじゅうぶんにおこなわれず、幼児期においてのぞまれる自我のめばえを正しく育てることを見失うおそれがあるのである。たしかに、もう一つ奥の次元におい

ては、結局は、社会的な環境の中で自立や自我のめざめがおこなわれるのではあるうけれど、今、教育の実践の目標や中味を問題にする次元では、この両面は一応はっきり区別されねばなるまい。だから、「社会」という領域よりも、たとえば「生活」といった方が適切であるという論も一理はあるが、私は、こうした異質的なものが、便宜上、「社会」という一つの屋根に同居させてあるのだ、ということをわきまえていて、適切なやり方をすればいい、というよう考へたいのである。

しかし、わるいことには、それだけではすまないことがある。と

いうのは、幼稚園教育要領であげている望ましい経験の中で、たとえば、個人的な生活に関するところがらのとりあげ方があまりにも部分的であることである。「健康」の場合は、文面におちてのことがあつても、類推ができるたり、ひとからげにことができるくらいであるが、「社会」の場合に、個人的な、あるいは社会的な生活における基本的なものが、ここにじゅうぶんにとらえてあるとはいにくいのである。何故そういうことがおどしてあるか、わけがありそうにもかんぐりたくなるのであるが、おそらく編集に関係した人たちが、自明なことをいちいちあげる必要を感じなかつたのではなかろうか。一般的にいって、児童教育書には、たとえばカリキュラムの編成などのときに、いちばん自明な基礎的なことはわざと書きあげないといった風習があるように見えるのは、皮肉に見過ぎる

のであるうか。例をあげれば、幼稚園にいって、友だちと仲よくあそぶ、こととならんで、あるいはそれより前に、ひとりで安定した気持ちであそべる、といったことがあるはずなのに、こういうことは取りあげない習慣があるようで、幼稚園教育要領の場合も、同断なのではなかろうか。だから、これに書いてある文面にはそうこうだわらずに、ひろく、こうした生活の態度や習慣に関したことは、みな「社会」に含まれるのだ、と思ってことを処理するのが賢明ではなかろうか。

△ 3 ▽

このように考えてても、「自然」になるといつそう途方にくれるようなことになる。本誌三月号に、太田次郎氏が端的に指摘されているように、「自然」の場合には、もつと根本的なところに問題があるようである。

「望ましい経験」として幼稚園教育要領にあげているものは、大体において、いわゆる自然界の事象に関するさまざまな経験である。こうした自然界についての経験が、児童においてもそれ自身にねうちがあるのは、当然のことであるが、指導書にあるように、「豊かな人間性」を養つたり、「生活に適応」したりするためにそれらがやくだつことは当然であるが、「科学性のめばえをつちかう」ということになると、そうかんたんにいっていいかどうか、私にはよ

くは分らない、ことを告白せねばならない。

私は、ひとつの私自身の見聞を述べることにしよう。幼児が二人、園庭に咲いたサルビヤや矢車草にせつせと如露で水をやっているのを、ほほえましいものとして見ていた私は、あることに気付いて、がく然とした。そして、いろいろなことを考えたのである。

というのは、彼らがそぞぐ水は、赤や紫の花そのものに目がけられているのであった。——幼児たちが、植物を愛護し、自然に親しむこと自体はいいことにちがいないが、そのことが「科学性のめばえをつかう」ことになるだろうか。現実を実証的に認識したり、すじみちたつた法則的な思考をしたりするようなことは、かけはなれたことではないだろうか。センチメンタルに安易に、この無関係の両者を混同してもいいものだろうか。また、幼児期の特徴といわれている自己中心的な、メルヘン的なものの見方と、科学的なもの見方はまるつきり反対のものではなかろうか。いわゆる科学的

事象に親しむことはそれなりにいいことである、そして、それをしせんにのばしていっているうちに、別のきつかけを必要とするかもしれないが、科学性のめばえの地盤になるかもしれない。しかし、それとならんで、少し成長したら「科学性」につながるようになるであろうような、別種の経験もあっていいのではなかろうか。たとえば、箱積木などを組立てているときに、力のバランスなどについての工夫や経験をもつたり、紙でつくったヒコーキをとおくまでとばすことを工夫したりすることが、「科学性」につづくものをもつてているのではなかろうか。領域「自然」としては、むしろこうした面をとりあげることも、考えてみていいのではなかろうか。

また、すっかり角度を変えて、素朴くな、「科学的」経験に通ずるような、遊具やおもちゃを工夫することも考えられないだろうか。それ自身が科学的な態度をやしなうとは思えないが、何かこうした方面からの道が開けるかもしれない、とも思うのである。

重ねて告白するが、「自然」については、私は決定的な意見を述べることができない。しかし、ただこういうことだけがいえる、近視眼的に「科学性」を押しつけたり、情的な自然愛などをそのまま科学性にすりかえたりしないで、幼児らしい経験をさまざまにあたせることであると。

また、思いかえして、こどもたちが幼児なりに動植物や自然界の

☆

☆

☆